

ほんがだいすき

わたしはほんがだいすきです。ほいくえんのころから、いろいろなほんをよんでいました。おかあさんもわたしがねるまえに、たくさんよんでくれました。

そのなかでも、『おむすびころりん』はおもしろくて、なんかいもよんでもらいました。しょうがつころにはいったら、きょうかしよにもでていたのでたのしくなりました。おんどくのしゅくだいがたときは、しつていたので、すらすらとよむことができました。

ひがしはらしょうがつころでは、あさがっこうにくると、みんなでどくしよをします。どくしよのじかんが、わたしはだいすきで、きょうしつにあるいろいろなほんをよんでいます。あさ、ほんをよむと、こころがおちついて、たのしくなります。

わたしは、がっこうでもほんをかりていますが、しのとしよかんでも、ほんをかりてよんでいます。ことしのなつやすみには、おかあさんといっしょにいつて、『このはおかねつかえます』というほんをかりました。

このほんは、こだぬきがあいすくりいむがたべたくなつたので、おかあさんだぬきが、このはおかねにかえるおはなしです。ほんとうに、このはおかねになるなんて、わたしはびつくりしました。おかあさんはこだぬきのために、なんかいもまほうをつかってたいへんだな、とおもいました。

あいすくりいむやおじさんがにゅういんしたときは、いっしょうけんめいおてがみをかきました。まいにちまいにち、おじさんがげんきになるように、おてがみをかきました。こだぬきはやさしいな、とおもいました。わたしだったら、まいにちかけるかな、とおもいました。おかげで、あいすくりいむやおじさんは、げんきになってたいいんできました。よかったとおもいました。

わたしは、このほんをよんで、こころがあたたくくなりました。またよんでみたいです。

黒磯市立東原小学校 一年 Kさん



わすれんぼうをなおそう

わたしは、とてもおもしろいほんをみつめました。それは、『わすれんぼうをなおすには』というだいいいのほんです。

そのおはなしのなかで、ララさんが、ロールキャベツをつくろうとして、おみせのまえまできて、かうものをわすれてしまったところが、とてもおもしろかったです。

もし、わたしだったら、ちゃんとわすれずにおかいものをして、りょうりをつくるのになあ、とおもいました。

ララさんは、けっきょくロールキャベツをわすれたまま、じゃがいもをかって、ぐつぐつにたじゃがいもに、ケチャップをかけて、たべてしまいました。

わたしだったら、それだけたべたのだったら、もしわすれてもすぐにおもいだすのになあとおもいました。

けっきょくララさんは、わすれんぼうを、なおすことはできませんでした。

わたしも、よくわすれものをしてしまいます。このほんをよんで、おかあさんと、わすれもののはなしをしました。おかあさんと、いっしょにかんがえました。

わすれものをしないように、きをつけるやくそくをしました。

黒磯市立東原小学校 一年 Eさん

ねるときの本

ぼくのいえでは、ねるときいつもおかあさんかおとうさんが、本をよんでくれます。本をよめないときは、おはなしをきかせてくれます。まいにちねるまえにぼくとおとうとは、きょうのねるときの本をきめるのがとてもたのしみです。でも、ときどきおなじ本になって、けんかになってしまいます。すると、「きょうはよまないよ。」とおとうさんにいわれるので、ぼくとおとうとはすぐにごめんなさいをいいます。

いま、ぼくがすきなのは『おおきな木』という本です。おとうさんがなつやすみにかつてくれました。ちびっこがおおきな木といっしょにあそんでいるところがだいすきです。でも、おおきな木がきられてしまうところがとてもかわいそうでした。まいにちおなじ本をもっていくと、「ちがう本にしたら。」といわれるけれど、ぼくはきょうも『おおきな木』をよんでもらいたいです。

おとうがすきなのは『あおくんときいろちゃん』という本です。ぼくもほいくえんのとき大すきでした。あおくんときいろちゃんがかよしになって、みどりちゃんになるところがとてもふしぎです。

ぼくとおとうとは、ねるときに本をよんでもらうと、よくねむるので大すきです。

河内町立岡本北小学校 二年 Kさん

本が大きい

わたしは、本がすきなのでひる休みにいつも図書室に行つて、いろいろな本をかりています。きよねんは学年で二ばん目に多く読んでしようじょうをもらいました。

この前『ブタのたね』という本をさがしていたら図書室のきみじま先生がいつしよにさがしてくれました。ちょうどそのとき一年生の女の子がかえしにきて、

「読むの。」ときいてくれたので、わたしは、「ありがとう。」

といつて、かりました。うれしかったです。

いえにかえつてからお父さんにも読ませてあげたら、わらつてから読んでました。弟やいもうとに読ませるとき書いてないことまではなしています。そうするとみんなおおわらいます。おかあさんはふつうに読みます。

本からいろいろなることがわかったり、できたりするようになりす。

夏休みに読んだ本で、こんなことがわかりました。

わたしは、自分からあいさつができません。でも、『ハムスターともだちつくろう』のななちゃんのように、あいさつは自分からしないといけないんだなとおもいました。

それにペットは、ちゃんとせわをしないとしんでしまうんだなとおもいました。

ハムスターをくれたゆうくんがてんこうして、行ってしまいました。そしてすこしたつて、今どはちがう子がてん

こうしてきました。

てんこうしてきただいちゃん、学校にあまりなれないとおもいます。でも、やさしい子がいれば、きつとすぐなれるとおもいます。

ゆうやくんが、ななちゃんにさかあがりを見せてあげました。ななちゃんは、だいちゃんにあのねちようのかきかたを教えました。

わたしの先生は、なんかいも

「人をきずつけちゃいけません。」

つていつもいつているから、わたしは先生にいわれなくても自分からすすんでやさしくしようとおもいます。

学校がはじまったので、また本をかりることができます。もくひようは、一しゆうかんに四さつ読むことです。本の中でどんなともだちにあえるのか、なにを教えてもらえるのかワクワクしています。

黒磯市立東原小学校 二年 Yさん



ありがとうカリブさん

まい週火曜日の朝、^注カリブの人が、わたしたちのきょう室にきて、本や紙しばいをよんでくれます。

「みんな見えるかな。たったほうが、見えやすいかな。」などと、気づかいながら、ていねいにきれいな声で、わかりやすくよんでくれます。わざわざ、わたしたちのために、朝早く、学校にきて、本をよんでくれます。朝いそがしいのに、とてもうれしいです。

ときどき本をかりに図書室に行った時、

「しつれいします。」

と、はいつていくと、かならず、やさしい声で、

「どうぞ。」

と、いつてくれます。きょう室に帰る時は、

「しつれいしました。」

と、いつて、ドアをしめると、

「はい。」

と、かならず、いつてくれます。わたしは、それが、とてもうれしいです。

わたしは、カリブさんのしごとについて、もっとしりたいと思いました。春休みに、おかあさんといっしょに、カリブさんの、しごとのお手つだいにいききました。それは、学校にあるぜんぶの本に、バーコードを、はることでした。すぐたくさんありました。いろいろなお手つだいをしましたが、一番たいへんだったのは、本の番号のバーコードの

数じを、さがすことでした。いっぱい数じがあつて、目と手が、つかれて、いたくなつてきました。でも、しごとをしているカリブさんは、しずかでした。しんけんでした。いつも、本をよんでくれる、カリブさんとは、ぜんぜんちがつていました。ほんとうに、カリブさんは、すごいと思いました。

わたしは、三日お手つだいにいきましたが、本がたくさんあつたので、なかなかおわりませんでした。おかあさんに聞いたら、カリブさんは春休み中ずっとしごとをしていました。先生が、

「きょうから、本かりられるから、休み時間にかりていよ。」

と、いつたので、すぐにいきました。

図書室のたなに本がきれいにならなでいたし、みんなの分のカードがならんでいてびつくりしました。カリブさんは、ほんとうにすごいと思いました。

わたしは、わたしたちのためにいっしょうけんめい本の整理をしたり、本をよんでくれたりするカリブさんがだいすきです。これからも、カリブさんのお手つだいをしたいと思えます。

鹿沼市立菊沢西小学校 三年 Hさん

注釈 カリブ…K.L.V. 鹿沼ライブラリー ボランティアの略です。

家族で読むと楽しいよ

夏休みのある夜、ぼくは家族といっしょに一冊の本を読んだ。本の題名は、『もののけレストラン』。短い話が十こ入っている。かなしい話やおもしろい話、そしてこわい話が組み合わせてある。ぼくは、一度読んでいたので話の内容はわかっているのですが、家族に読んであげようと思った。

まず、『カーおばさん』という話をよんだ。トラックにはねられて死んでしまった男の子のお母さんが、ゆうれいになり歩道橋をわたる子どもをつき落とすというお話だ。

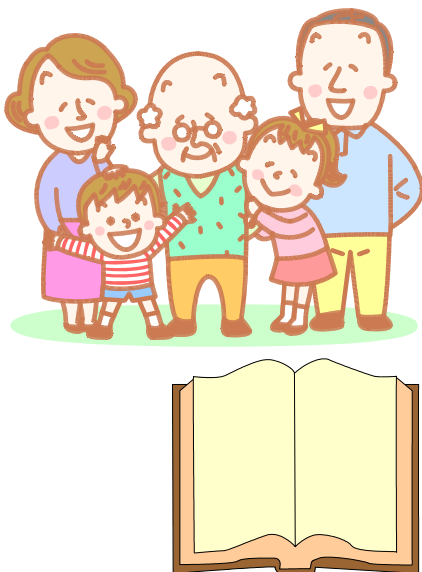
ぼくは、この言葉にかんじょうをこめて読んだ。弟と妹は、体を取り出してよく聞いていた。こわい場面では、体がかたくなっているのがわかった。読んでいるとき少しつかれたけど、みんなよく聞いてくれてるのがうれしくて、がんばって読んだ。お母さんが、読み終わったぼくに、「上手だね。気持ちよこめて読めたね。」と声をかけてくれた。ぼくは、ちよっぴりは、おかしかった。

次に、お母さんが『おれは、おれさ』というお話を読んだ。森の中で一人でくらすおじいさんのところに五人の大男がやってくるとい話だ。おじいさんがあつい湯を一人の大男の足にかけたとき、お母さんが「ギャー」と大声を出した。ぼくたち家族は、大わらいをした。「びっくりしたでしょ」とお母さんは、ニヤツとわらった。ぼくは、こんな読み方もあるのかなと思った。

そして妹は、『白い手の妖怪』を読んだ。

妹は、まだようち園児なのに、二ページも読めた。ぼくは、すごいなと思った。残りのページは、弟が読んだ。弟はせいいっぱいこわい感じを出そうとして読んだが、ぜんぜんこわくなかった。

家族で、本の読み聞かせを大かいにしたのは初めてだったが、とてもおもしろかった。テレビを家族で見るとおもしろいけど、本は、自分でそうぞうできるからちがったおもしろさがあるなと思った。秋になったら、夜が長くなるので、またしてみたいなと思った。それまでに、弟か妹が喜びそうな本を見つけておこうと思う。



黒磯市立東原小学校 四年 Mさん

本が大好き

夏休みに、お父さんと「川のつりの会」に行きました。そのつりの会に、新しい人が入ってきました。横はまからなすまで引っこして来たそうです。その人の子どもは、わかちゃんと言って、私の弟と同じ五歳で、川で一日遊んだだけで、新しい友だちになりました。

数日後、図書室にわかちゃんが行きました。最初に『子ねこが来たよ』という紙しばいを読んであげました。『子ねこが来たよ』は、子ねこがだれかにすてられてしまい、みこちゃんが拾ってあげたという話から始まります。それを聞いていたわかちゃんは、私に、「読むの上手だね。」

と、言ってくれました。私はうれしくなりました。

次に本の所に行きました。本の所では、わかちゃんが、「どれにしようかなあ。どれにしようかなあ。」

と、まよっていました。でも、まよっているのも楽しい感じがしました。

そして一さつの本を選びました。その本は、遊び絵本で、ページごとにめくると絵が変わります。わかちゃんは絵が変わるのがおもしろいように笑ってばかりいました。ふたりで読むのも、とても楽しくて、私はうれしくなりました。わかちゃんと私は、五さつ本を借りました。

そのまま、川へ行き、紙しばいをわかちゃんに読んであげました。本もふたりで読みました。初めて会ったとき

よりもずっと仲よしになりました。

私は、一年生の時から本が好きです。弟も私が図書館に行くせいかな、弟までもが、本を好きになってしまい

「図書館へ行こう、行こう。」と、毎日のように言います。それだけ本が好きなんだっていうことが、お母さんにもわかったみたいで、図書館に連れていってくれました。

私も弟もわかちゃんも、本が大好きです。

黒磯市立東原小学校 四年 Mさん

本がくれた幸せ

私は本が好きです。

私が本を読むのは、ストレスがたまった時です。学校でも家でもいやなことが続くと、ストレスがたまりません。ストレスがたまっている時に本を読むと、とても気持ちが落ちつきます。それは、私が本を読むのが好きなのと、本によつてストレスが消えてしまうからです。

私は小さい時、ねる前にお母さんによく本を読んでもらいました。長いお話も短いお話もありましたが、特に心に残っているのは、『メイベルおばあちゃんシリーズ』と『銀

河鉄道の夜』です。私が読んでもらっていると、いつの間にかひよっこりお兄ちゃんやお姉ちゃんもやってきて、一緒に聞いていたりしました。お話を聞いているうちにだんだん眠くなってねてしまったこともありました。しかし朝起きると、ちゃんとふとんの中にいました。私がねた後で、親が一階の部屋まで運んでくれていたのだと思います。お母さんが読めない時はお父さんに読んでもらいました。そのうち自分で読めるようになったので、今ではたいていは自分で読んでいます。

この間、しばらくぶりにお母さんに『幸福な王子』を読んでもらいました。今まで悲しいお話だとばかり思っていたのに、小さいころには気がつかなかったいろいろな細かいところのおもしろさに気がついて、お母さんとふたりで笑ってしまいました。楽しかったです。

私は本だけではなくマンガも大好きです。本やマンガのよいところは、一冊あればみんな楽しんでくれるところです。お姉ちゃんの部屋にあるたぐさんのマンガも、ちよこちよこ読ませてもらっています。ただし、お姉ちゃんの気分しだいでの「いいよ」と言ってくれない時は読めません。しかし、私もたまにねばります。すると、お姉ちゃんは、最後にはあきらめて貸してくれることがあります。面白いところは、お姉ちゃんと同じなので、いつまでもその場面にいつ一緒に話せるので楽しいです。

家には『世界むかし話』という古い本があります。一九六八年に偕成社から出た本です。これはお母さんが、昔、おじいちゃんに買ってもらって読んだ大切な本です。おじ

いちゃんは、私が生まれる十三年前に亡くなっているのですが、私は会ったことがありません。けれども、この『世界むかし話』の本を通じて、おじいちゃんの思いが私にも伝わってくるような気がして、温かい気持ちになります。

この中に入っているたぐさんのお話の中で一番好きなのは『せんにんがおしえたしあわせ』という中国のお話です。

ウーセイという青年が、自分の幸せを求めてせんにんに会いに出かけるのですが、途中で不幸な多くの人たちに出会います。人々は、せんにんに会いにいくというウーセイに、自分たちのことも聞いてきてほしいとたのみます。しかし、やっとせんにんに出会えた時、せんにんは、自分の願いかどちらか一つしかかなえてやれないと言います。ウーセイは、人々の願いをかなえてほしいと言いました。自分一人が幸せになるより、多くの人たちが幸せになった方がいいとウーセイは思ったのです。

私は、自分だったらどっちを選んだろうと考えました。とてもまよいますが、多分ウーセイと同じ方を選んだと思います。やっぱりみんなが幸せになった方がいいと思うからです。そして、ウーセイはなんてやさしい人なんだろうと思いました。

こんなふうに、今まで出会ったたぐさんの本は、私にいろいろなことを教えてくれました。でも、まだまだ読んだことのない本がたくさんあります。これから、どんな本に出会えるかなと思うと、私は楽しみでワクワクします。

平凡な日々の幸せ

「つまらないな。」

「なんで、生きてるんだらう。」

ぼくは、ついこういう言葉をつぶやいてしまうことがある。すると必ずお母さんが、「真はぐちっぽいんだから……。」と困った顔をする。

確かに、ぼくの言葉に大した意味はない。せつかくの休みの日にどこにも行けなかったり、宿題が忙しかったりすると、つい不平不満を口にしてしまう性格なのだ。特にぼくは、三番目の子なので、お姉ちゃん受験や、お兄ちゃん部活が優先され、後回しにされることが多かった。心の中ではいつも、

ぼくもがんばっているのに

と思っているのに、認めてもらっていない気がする。

そんなある日、お母さんが、

「この人、すごいんだよね。」

と、一冊の花の表紙の本をぼくに渡した。『鈴の鳴る道 星野富広』どこかで聞いたことがある名前だった。

「体操中の事故で、体が動かなくなっても、口に絵筆をくわえて、こんなにじょうずに花の絵を描いたり、詩をかいたんだよ。」と、母。

やっぱり……と思いつつながら、ペラペラめくると、「雨」というページがあった。それは、心配した女の子が車椅子の後をついて来てくれたという内容の詩で、絵もとても繊細だ

った。

「これ、道德の時間にやったよ。」

ぼくは、思わず、大きな声で言ってしまった。「ねえ、真の好きなページを読んでみて。」お母さんに言われて、最初からいいねいに詩を読んでいたら、ふせん紙を付けたページだらけになってしまい、顔を見合わせて笑った。

「じゃがいも」もいいよね。「いのち」もわかるなあ。」

二人の選んだ詩がほとんど同じだったので、話はずきなかつた。でも、「豚」のページにふせん紙がはってあったのを見つけて、「へえ、「こういうのも好きなの?」「だって、豚はかわいそうだと思うもん。」と、意見のくい違いも見られた。

ぼくたちのやり取りを見て、お姉ちゃんが話に加わってきた。

「私が一番好きなのはこれかな。」

と、「しおん」という薄紫の花の絵はがきを持ってきた。お母さんは、その大切なはがきを見ながら思い立ったように、「星野富弘美術館に行ってみよう。」と、ぼくに言った。

運転手のお父さんは、早速インターネットで調べ、近所のおばあちゃんにも声を掛けた。勉強が忙しそうなお姉ちゃんも部活があったお兄ちゃんも休んでくれて、久し振りに皆がそろった。日光を抜けて、足尾を通り、静かな水面の草木湖のそばに、美術館が立っていた。初めての口で書いた時のたどたどしい文字が、壁一面に描かれていた。長い入院生活で、積極的に生きようとする気持ちを失いか

けていた富弘さんが、必死に一字一字書いたかと思うと、ぼくには力強く感じられた。詩の文字には、命がこもっているようで、花の茎にはきれいな花を支える力強さがあり、詩画集を見たとき以上の感動を感じた。さらに、このような作品を残せたのは、お母さんの励ましがあったからだという事がよくわかった。

この美術館に訪れる人の数は多く、作品は世界中の人の感動を呼んでいる。ぼくはまだ富弘さんのように、生きるか死ぬかの辛い経験をしたことはない。でも、富弘さんの詩画集と実際の作品を通して、平凡な日々の中にも喜びを感じようという気持ちになった。ぼくがこうして健康でいられるのも、口には出さないけれど温かい家族があつてからこそだとしみじみ思う。帰りに車の中で“かぎりなくやさしい花々”を読みながらそう思った。

宇都宮大学教育学部附属小学校 六年 Nさん



本と私

本と私の最初の出会いは、生後六か月の時だったと母が話してくれました。本といつても、動物や車がかかっているような小さな小さな絵本でした。本が大好きな子どもに育ってほしいという両親の願いで、このころから父が会社帰りに書店に立ち寄っては私の気に入るようなかわい絵本をたくさん買い与えてくれたそうです。

幼稚園児のころは、元気で活発といわれている現在の私からは想像できないほど、外で遊ぶことやテレビを見ることよりも静かに絵本を読むことが好きでした。いつも身近に絵本があり、いつも目にふれていたもので、私にとって、本に囲まれた生活は、自然なものでした。両親もよくひざの上に私を座らせては、本の読み聞かせをしてくれましたので、なおさら本好きになったのだと思います。絵本を読んでもらうことは、とてもこちよく最高に楽しい時間でした。今思うと、その時間だけはいつもの日常とはちがう私だけの特別な世界があり、親とともに楽しみ、喜び合えることがきつとうれしかったのだと思います。

小学校低学年のころは、図書室に通い、お互いにお気に入りの本をすすめあいました。本を通して友達との仲もいっそう深まりました。また、学校の読書週間をととも楽しみにしていて、前日に欲しい本を買ってもらえることがとてもうれしかったことを覚えていきます。

最高学年になった現在、学校から帰宅後は勉強が中心に

なっているので、休日を利用して読書を楽しんでいます。いろいろな分野の本に興味を持ち、新しい発見や感動をすることで知識が高まり心が豊かになれた感じがしています。

知識が高まることでまたそれに対して疑問が出てくることがよくあります。調べる手段としてインターネットを利用する方法もあります。しかし、以前に社会の授業で歴史についてインターネットで調べたところ、年表でまちがえてのっていることが一度だけありました。こういうこともあるのかと始めて知りました。その後もインターネットを利用することもありますが、私にとっては本が一番の資料であると確信しています。

最近、「活字ばなれ」という言葉を耳にしますが、私にはとても信じられないことです。活字のない生活は考えられないほどです。そう思えるようになったのも本のすばらしさを知ったからです。世界の国々では、一冊の本も手にすることのできない困難な状況にある子どもたちが大勢いる中、こうして本を自由に読むことができる環境と本のすばらしさを教えてくれた両親に心から感謝したいと思います。そしてこの気持ちを忘れずに、これからも読書を続けていきたいと思います。

宇都宮大学教育学部附属小学校 六年 Yさん

私と本の関係

私が初めて本にふれたのは、3歳のころだった。初めは祖父や母が本を読んでくれていた。

それから、私は一年生になると、もう本を一人で読むようになった。まだそのころは、母といっしょに読んでいた。

そして、三歳から小学校二年生ぐらまで、好きだった本は、マツチ売りの少女だった。私が四年生になると、もう一人で読みたがっていたということを知り、母から聞いた。

私は、聞くほうも好きだが、話すほうも好きだった。

私には、二年生の弟がいます。それで私は、弟に、時々ねる前に、本を一冊読んであげています。私が弟に、本を読んであげると、「おねえちゃん本読むのうまいね。」と言ってくれるのがとてもうれしいので、私は本を読むのが好きです。

宇都宮大学教育学部附属小学校 六年 Hさん

本を読んで…

私は、友達に本をすすめられて、本を読むようになって、毎日がとても楽しいです。

最初に、すすめられた本は、『ハリーポッターとけんじやの石』でした。

とても、おもしろくて、友達にかりてかえりました。おもしろくて、六回は、読みました。その後も、友達の家に行つて、『ハリーポッターと秘密の部屋』などをかりて、何回も読んで、毎日のように夜中まで読んでました。その友達はほかの小学校にも友達がいて、私が友達の所へ本をかえしに行くと、ほかの小学校の人がいて、私と友達とほかの小学校の人は友達になりました。三人で遊ぶ事がおおくなり、土、日は、ほとんど遊ぶようになり、三人でいると楽しいと感じています。

私は、もう一人の人も友達になりました。私が、ある本屋に行った時に、ある女の子が、

「バスケットの本、ある所知ってる？」

と、聞いてきたので、私は、

「知ってるよ、そこ！」

と、言うと、その人が、私に、

「名前、何て言うの？」

と聞いてきて、私が

「山、綾奈です。」

と、言うと、その人が、

「私は、　　って言うんだ。　　って、よんでね。」

「うん、じゃあ、私の事、綾奈ってよんでね。」

と言うと、

「うん」

といい、それから友達になり、夏休みなど遊ぶようになりました。それから、その人のお父さんとお母さんが、私のお父さんとお母さんとお母さんになりました。それに、私のお父さんとお母さん、お兄ちゃん、私と妹、友達のお父さんとお母さん、弟と妹で海に行つたりしました。その友達とは、プールに行つたり、洋服を買いに行つたり、こものを買いに行つたり、プリクラをとりに行つたりして遊びました。その日に本屋に行きました。すると、目のみえない人がいて、私たちは、その人に、「何を、さがしているんですか？」

と聞くと、その人が、

「目のみえない人が、さわるとわかる本。」

と言うので、私たちは、さがしてあげると、その人の子どもがむかえにきて、その人も友達になり、その時、思いました。人にやさしくすると、友達がふえて、楽しい日がふえる。そう思つてからは、人にやさしくできるようになりました。

黒磯市立東原小学校　六年　Ｙさん

頑張った夏休み

私は、夏休みに二十四時間テレビという番組を見ました。私の好きなアイドル歌手が出演するということで、楽しみにしていました。

番組が始まり、様々なゲームやドラマ、ドキュメンタリーが放送されるにつれ、しつかりと考えていけなくなると思うことがたくさん私の心の中に強くひびいてきました。

それは、体の不自由な方々のがんばっている姿です。また、それを支えて一緒にがんばろうとしている人々の優しさです。

私はバレーボール部に入って、とても活発に動きまわっています。健康にも自信があります。それでも、少しづらいいことがあると、「できない」とか「やめたい」などの弱音をはくことがあります。そんな自分に、必ず時間がたつとなさけなくなることもありました。このテレビ番組は、自分を強く、もつと変わりたいと思うきっかけになりました。

その後、私は本屋へ出かけることになりました。そこで、私の目に飛びこんできたのは、『ありがとうの本』というタイトルの本でした。人に優しくしたことから生まれてくる気持ちよさについて書かれていました。テレビをきっかけに自分を変えていこうとしていた私にとって、人に対して優しくするということも、自分がふだん気にしていなかった部分だったので、読んでみようという強い気持ちにな

りました。

夏休み中にすぐに全部読みきり、なんか自分が大きくなったような、すがすがしい気持ちになりました。

ある日、お母さんと電車に乗る機会がありました。その日は、日曜日で電車の中は混んでいました。ふと、私のとなりの方の席を見ると一人のおばあさんが立っていました。お母さんは気づいていませんでした。私は、口のところまで、「どうぞ。」という言葉が出かかりましたが、実際には、出ませんでした。そして、顔が真っ赤になってしまいました。お母さんが、「どうしたの。」

と聞いたので、私は、「なんでもないよ。」

と答えました。勇気がなかったのです。せつかく自分が大きくなった気がしていたのです。私は、そんな自分に腹が立ちました。家に帰ってもう一度あの本を読みかえしました。

それから二日後です。今度はお母さんの仕事の手伝いについていきました。そこは大きなお店で、たくさんの方が買い物にくるところです。手伝いもあきてきたので、自分の買い物しようとして歩いていると、階段の前で大きな買い物袋をいくつも持ったおじいさんがいました。そのときは、自分でも自然な感じで

「その荷物持ちますよ。」

と声が出ました。おじいさんは、「大丈夫だよ。」

と言ったけれど、

「私は大丈夫です。」

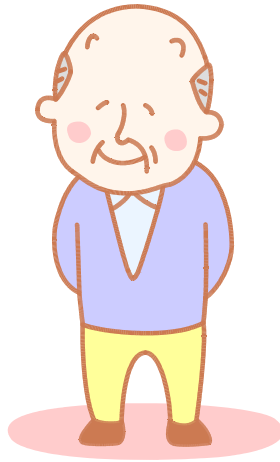
と答えました。おじいさんは、

「悪いねえ。」

と言って二つ買い物袋を私にわたしました。

とてもうれしい気持ちでした。みんなに自まんしたいくらいの気持ちです。少し成長した夏休みでした。

黒磯市立東原小学校 六年 Yさん



うつのみや子ども賞選定委員になって

「ごめん、もう少しまって。」

ぼくたちのあいだではたまにこういう会話があります。

ぼくは今年、友だちにさそわれて、図書館でぼくのあつたうつのみや子ども賞選定委員になりました。

もともと本が好きだったのでさそわれてすぐに申しこみま

した。いままではおもしろそうだとすすめられた本や自分で選んだ本をかりてきて、読みおわらなかつたときはえん長をして読んでいました。選定委員では、指定された本を指定された日までに読まなければならぬので、少し計画をたてて本を読むようになりました。それに、ふだん二人が行っている図書館と選定委員会のある図書館がちがうのでたくさん本が読めるようになりました。

選定委員会は毎月第二土曜日にあります。そこで、選定委員になった五・六年生二十人ぐらいが集まって本の評価をします。毎月四冊読むので一か月に友だちと二人で二冊ずつ交わって読みます。それに、友だちと読むペースが同じではないので、おたがいに調せいするのが大変です。また、ものをしんさするのは好きな方なので、本に点数をつけるのはとても楽しいです。

ぼくがおもしろいと思った本でもおもしろくないと思う人もいるし、逆におもしろくないと思った本でもおもしろいと思う人もいます。人それぞれ好みや感じ方がちがうことがよくわかりました。こうして、直せつ言葉をかわさなくても、本を通して心のふれあいができるのではないかと思います。そして、いっしょに入った友だちとも本について話をする機会が増えたように思います。

こういうわけです。うつのみや子ども賞選定委員になって、よかつたと思います。これからある七回の選定委員会もがんばっていききたいと思います。

宇都宮市立横川東小学校 六年 Hさん

世界で一番うれしい言葉

「お姉ちゃん、ありがとう。」

小学六年生の夏、私は、図書委員をやっていました。図書カードの整理や、古い本の修理をしていると、先生が「約、一か月後に全学年、全クラスに図書委員会が読み聞かせをやります。図書委員会は三人一組になって本を読み発表します。本は自由に選んでください。」

と、おっしゃいました。私たちの班は三年二組を担当することになり、三年生にもわかって、関心を持ってもらえるように、一週間もかけて、一生懸命本を探していました。やっと見つけた本、『おこりじぞう』に決めました。戦争中の広島が舞台で、笑いじぞうと呼ばれるお地蔵様が出てきます。そのお地蔵様はいつもここに笑っていました。ある女の子が「み…水…」とお地蔵様に近づいていくと、お地蔵様の顔はどんどん険しくなって、まるで仁王の様な顔になり、怒りと悲しみで目から涙を出し、女の子の口へと流します。その後、お地蔵様は力尽きて、粉々の塵となり消えていきます。女の子は水を飲み幸せそうに亡くなります。

この話を私たちは、紙芝居かみしばいにすることに決め、毎日少しずつ休み時間をつかって描きました。昼休みも読む練習をしました。大きな声ではつきりと。

「今日、いっしょに遊ぼう。」

「ごめんね、今日、図書の読み聞かせの練習があるからこ

めんね。」

と、友人からの誘いを何度も断った事もありました。でも三年生が喜んでくれるならと、頑張りました。

読み聞かせ二週間前、同じ読み聞かせの班の友人が「ねえ、お地蔵様が怒るところとか、迫力が出る場所に楽器で大きい音とかだせば、もっと迫力が出るんじゃないかな。」

と、思いついたように言ったので、私は、驚きと興奮の入りに混じった不思議な気持ちで言いました。

「私も少し考えてた。そうだね迫力だから…そうっ、シンバルなんてどう。」

と、皆の顔が一斉に変わりました。

「うん、うん、それすごくいいよね。」

「うわあ、ナイスアイデア、決まりだね、私、賛成だよ。」読み聞かせ当日は、私たちは、かちこちに緊張していました。

すると先生が「あなたたちは、本当にすばらしいわ。さあ、思いつきり

いってらっしゃい。」

と、温かくおっしゃってくださいたおかげで、少し安心しました。「失礼します。」

私たちは、勢いよく三年二組の教室に飛びこんでいきました。「これから、『おこりじぞう』の紙芝居を始めます。

礼っ。」

私たちは読み始めました。ゆっくり、はつきり、大きな声で。特に鉤括弧かぎかっこのところは、いっぱい、いっぱい心をこめ

て言いました。最後のクライマックス私はシンバルを打ちました。

「ババーン」

ざわっとしましたが、私はやった、と思いました。友人もにこつと笑い、ついにすべて終わりました。少しさびしさを感ぜました。

「ありがとうございます。礼つ。」

礼をした瞬間一瞬間が止まった気がしました。すると、教室の中が一斉に拍手で埋めつくされました。それに、中には、

「すごい、びっくりしたあ。」

「先生、もう一回見たいです。もう一回やらないんですかあ。」

と、言ってくれる子もいました。ふと気付くと女の子が私を軽くたたいて呼んでいます。不思議に思っ行って、女の子は言いました。

「お姉ちゃん、ありがとうっ。」

私は胸がいっぱいになり笑顔で言いました。

「こちらこそ、ありがとうねっ。」

鹿沼市立北押原中学校 一年 Kさん

本を通して

私は小さいころ祖母にいつも絵本を読んでもらったのをきっかけに、本が好きになりました。中学生になった今も本を読むことが好きです。ある日、学校の図書室で本を借りようと本を選んでいる時、国語の先生に

「この本おもしろいから読んでみな。絶対にはまるから。」とある本を勧められました。さっそく私はその本を借りて読みました。読んでいくうちにだんだん私ははまっていききました。そしてドキドキしながらあつというまに読み終わってしまいました。今まであまり読んだことのない冒険の本でした。

そのことがきっかけで国語の先生と親しくなり、本のことだけでなく、いろいろなことを話するようになりました。

そしてその先生に

「『KLVジュニア』をやってみない？」
と言われました。

『KLVジュニア』とは、学校の本の修理や新刊図書の受け入れ、小学校の本、紙しばいの読み聞かせなどを行っている『KLV（カリブ）』の人のように、中学生が本の修理やペーパーアターなどをやることです。

私は先生の話を聞いて興味を持ち、友だちといっしょにやってみることにしました。『KLVジュニア』では、主に素話（すばなし）といって、道具も何も使わないで話を語ることの練習をします。語り方などがけっこう難しいの

ですが楽しいです。素話の他にも、小学校の本の修理や、他校の『KLVジュニア』といっしょにペープシアターをやったりと、どの体験も初めてでしたが、とても楽しかったです。私は今、素話を覚えて語れるように練習中です。私は本のおかげで先生と親しくなったり、『KLVジュニア』という新しい体験をして他校の生徒と交流ができました。本の中には、話があり、その話に出てくる人物がいて、その人物・話によって筆者の思いがあります。私はいろいろな思いを伝えてくれる本をこれからも読みたいと思います。

鹿沼市立板荷中学校 二年 Hさん

読書を通じたふれあい

『ハッピーバースデー〜命輝く瞬間〜』を読んで、私は母とこの本について話し合いました。

私は小学四年生のときに友達に紹介されて初めてこの本を読みました。最初の一行から最後の一行まで感動づくしの本で、私は初めて読んだときからこの本が大好きになりました。私も母も、昔から本を読むことが好きで、私は母にもすすめました。

本の中で、主人公の明日香は母親に「明日香なんか生まなきゃよかった。」と言われてしまったのですが、それを「お母さんは彩乃のこと生まなきゃよかったなんて、思ったことないよ。」

と言いました。私はすぐうれしかったです。元から母とは周りの友達と比べて仲がよいほうで、二人で買い物などにも出かけていました。この本を読んで、私と母は今までより、さらに仲よくなった気がします。

最後のほうに、母親は明日香に今まで言ったことをあやまって、仲直りをするのですが、仲直りしたあとと私と母のように二人で出かけたりしませんでした。私と母は本が読み終わったあと、そのあとの明日香たちはどんなふうなのかを考えました。きつと二人で買い物をしたり、いろいろなところへ出かけたりしているんだらうな、と思いました。母もそう思っていたようです。

母は私に「ちよつと遠いところまで買い物に行こうか。」

と言いました。少し子どもじみてしまうのですが、私は、「私が働いて最初にもらったお給料でお母さんとどこか、おいしい物、食べに行こうね。」

と約束しました。とても仲がよかったのですが、こんな約束はしませんでした。この本のおかげでいろいろな約束ができたり話し合えたりしてよかったです。

矢板市立矢板中学校 二年 Mさん

一冊の本を通して

少し前、中学校の図書室に新しい図書が入りました。新しい図書は年に数回ほど、私たち図書委員が生徒のリクエストをもとに選定して入れます。

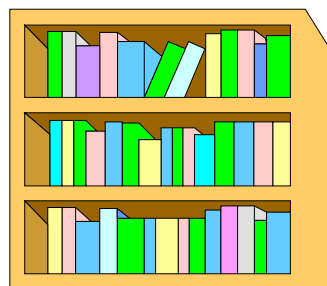
今回入れた新しい図書の中に今世界中で大人気の小説シリーズが上下巻ともに入りました。皆が皆、本当に楽しみに発売されるのを待っていました。そして発売日の次の日には学校中の生徒が買い、先生までもが朝の読書の時間に読んでいくくらいで、もちろん図書室にも入ってきました。基本的に本は一冊ずつしか入れないので、もう本当その日は争奪戦そうたうせんになってしまい予約はビッシリでした。

貸し出しを開始してから数日。買った人も借りた人も読み終わったころ、いつものように図書室で話をしていると、ある人がその小説の話を持ち出してきました。すると周りの人たちも寄ってきて、「ここはああだった」「よかった」「続きが気になる」「その先は言わないで!」とだんだんにぎやかになっていき、とても話が盛り上がりました。本当は騒がしくしてはいけない図書室もこの時は少しいぐさいぐらいで、一年生から三年生まで関係なくずっと大勢で話をしていました。みんなの考え方やその小説に対する感想がおもしろく本にはすごい力があるのだと思い知らされました。

私の学校ではとても図書室を利用する人が多いのですが、そんな皆が一冊の本を通して楽しく話をするので

きる場になっているのはすごく素敵すてきだと思います。今はこの本を通して幅広い人たちと話しが出来たらどんなに楽しいだろうと考えながら一冊一冊を読んでいます。

宇都宮大学教育学部附属中学校 二年 Yさん



本と私

私は、今から二年前に宇都宮大学付属中学に入学しました。今までと違った新しい環境の中で一番私が心配していたことは、この中で友達を作り、うまくなじむことができるかという事でした。なぜかというと、私は人付き合いがあまりうまくなく、また、外部受験をして入学したため同じ小学校からの友達が少なく、知っている人が同じクラ

スにいなかつたからです。

なかなか自分から話しかけることができずに過ごしていましたが、私の後ろの席に座っている人が、朝の十分間の読書の後に私の読んでいた本を指して「私もその本を読んだことがあるよ」と話しかけてくれました。そのことがきっかけで私たちはよく話すようになりました。お互いに本が好きで沢山の本を読み合い、感想を述べ合ったり、お勧めの本を紹介し合ったりしているうちに友達の輪も広がっていき、気がついたころにはクラスに沢山の友達ができていました。

また、友達の図書委員から、本が好きなら色々な種類の本を読むことも大切なのではないかと言われ、図書室を少しずつ利用するようになりました。私は、図書室は静かに入りにくいというイメージ持っていたので授業の調べ学習のときぐらいしか利用したことがなかったのですが、図書委員の先輩や司書の先生が丁寧に接してくれてとても身近に感じました。図書委員の先輩たちは、文学だけではなく社会科学や総記などの普段は手に取らないような種類のお勧めの本を紹介してくれたので自分の読書の幅が広がったと思います。

本を通して私は友達の輪を広げることができ充実した中学生を送れるようになりました。

宇都宮大学教育学部附属中学校 三年 Iさん

本の絆きずな

私には、二つ年上の姉がいます。幼少のころはよく一緒に遊んでいたのですが、歳を経るにつれ疎縁になり、彼女が大学に入学したころには、話をするどころか顔を合わせず機会すら皆無に等しい状態でした。私も何とか彼女と話す機会を持つと努力したのですが、互いに忙しくてそれどころではない、というのが実情でした。それに、たまたま話す機会があつたとしても、姉と私とは共通の話題もなく、何を話したらいいのかわからなかつたのです。

そんなある日、私は友人と『屍鬼』という本の話で盛り上がりました。姉の部屋でその本を見かけたことを思い出した私は、機会を見て、「『屍鬼』って面白い？」と姉に話しかけてみました。すると、姉は目を輝かせて、力いっぱい頷き、「『屍鬼』の魅力について楽しげに語ってくれたのです。そして、『屍鬼』を貸してほしいという私の申し出を快く受けてくれました。

『屍鬼』は上下巻セットでかなり重量感のある本だったので、姉が言ったとおり非常に面白く、読むのが止まらなくなるほどでした。読み終えた後で姉にそう伝えると、それならば、と似たような系統の本をさらに数冊貸してくれました。そちらもやはり分厚いものですが、『屍鬼』以上に面白く、やはり読むのが止まらなくなって、一気に読み終えてしまいました。それらがあまりに面白かつたので、そのお礼として、私は自分の気に入っている本を姉に貸す

ことにしました。数日後にそれらを返してくれた姉は、「これ、面白かったよ」と笑顔で言ってくれました。

それ以来私たちは、自分の気に入つた本を教え合つてはそれについて語り合っています。姉が教えてくれる本はどれも面白いので、読む本を探している時にはとても助かります。また、姉も私が教える本を「どれも面白い」と言ってくれるので、嬉しく思っています。おかげで最近、話の糸口が見つからないなどということはなく、逆に話しすぎて時がたつのを忘れてしまうほどです。私は、姉と自分の絆になつてくれた本に、とても感謝しています。

栃木県立足利南高等学校 二年 女子

今まで読んだ私の本について

小さなころから読み聞かされた物語は、気付かぬうちに覚えてしまっているものです。みなさんも身に覚えがありませんか。

例えば、『シンデレラ』。継母と義姉に虐げられながらも王子様と出会い、恋をし、幸せをつかんでいく女の子の物語です。一度は聞いたことがあると思います。他にも、『白雪姫』や『赤ずきんちゃん』、『浦島太郎』、『桃太郎』

などのグリム童話や昔話、いつの間にか知ってしまった物語ばかりです。私たちは知らず知らずのうちに本との出会いをしているのです。

特別印象的な本との出会いといわれても、特にある訳ではありません。しかし、母に勧められて読んだ本や興味が引かれて読んだ本など記憶に残っているものです。その中の一つを簡単ですが少し紹介させて頂きたいと思います。去年の読書感想文を『GO』で書いたのですが、私はこの本を映画で観ていました。一時、話題になったのですが、知っていますか。

主人公である男子高校生は、日本人と朝鮮人との混血なのです。ただ朝鮮人であるというだけで差別され、区別されるのです。そのことに憤りを感じ、葛藤する様子は読者である私たちにひしひしと伝わってきます。

本は不思議もので、作者の考えや強い想いが長い時間の果てに一冊の本になるのです。一種の伝達方法であり、最も理解してもらえらる手段であると私は最近思います。私は本が大好きです。

ミステリー小説、SF、ファンタジー、恋愛小説、エッセイなど種類は様々ですが、その一つ一つに作者の思いが込められている事は変わりません。それをどう受け取るのかは読者である私たち個々にかかっているのです。何を訴えられているのかをきちんと理解し、その事を考えるのが大切な事ではないでしょうか。

本との出会いはすぐ隣に存在しています。たまたま立ち寄った本屋さん、目に留まった本、または私のように映画

を観て興味を持った本か、いつ、どこで、心に残る本に出会えるかは誰にもわかりません。もしかしたら通り過ぎてしまったかも。それでも私は一生のうちに一冊、心の奥に残る一冊を見つけないと思いません。

栃木県立小山城南高等学校 二年 Iさん

ありがとう

私たちには、生きていく上で乗り越えなければならぬ試練が必ず訪れる。その試練は人により異なり、乗り越えるまでの期間もさまざまだろう。そんななかで、わたしに課せられた試練とは、友人関係だったように思う。

高校二年のとき、私は友人とささいなすれ違いから絶交状態になってしまい、いつのまにかクラスでもひとりになつてしまったのだ。あの当時は、学校に通うのが辛くて、その空間から抜け出したいくて、ひたすら図書室に通っていたのである。そのような日々が続いていたある日のことだ。ある同級生が私の好きな作家の本を読んだらしく、「この本よかった。」とうれしそうに話しているのを発見したのである。次の瞬間、私はおもわずその子に話かけていた。「この本、おもしろいよね！」それから、その子とはすぐ

友達になることができ、図書室に通うのが楽しくなったのだ。それだけではない。その子の他にも本を通したふれあいにより多くの友達も得ることができたのだ。

一度は本気で死のうと思ったこともあった私。けれど、今は生きていて本当によかったと心から思う。これも、たくさん本や友人たち、司書の先生がいてくれたからだと思ふ。そんな人たちに、今心からお礼を言いたい。

「ありがとう」

私は、人生は出会った人によって決まるのではないかと思う。一瞬視線が合ったただけの人との出会い。本を読んで作者の考えに触れるという出会い。出会いかたは人によつてさまざまだろう。しかし、私はそんな一瞬の人との出会いも、作者の考え方に触れる出会いも大切にしたい。偶然的引き合わせを待っているだけでなく、積極的に出会いを探したい。もし失敗したとしても、それを恐れずに前に進む人間になっていきたいと思う。そして、ひとりでも多くの人と出会い、かけがえのない仲間を増やしていきたい。

県南女子高 三年



雨が好きになつたわけ

村雨、桜雨、花の雨、時知る雨、七夕流し、雨夜の月、雨夜の物語……様々な雨たち。

雨が降ると、世界が色付きになると思う。雨の一粒一粒が、それぞれ物語を作っていく。雨に濡れて緑が濃くなる木々、まるで雨の足跡であるかのように波紋が広がる水たまり、雨に洗われて輝き、見るものすべてを映し出す道路。世界をオレンジのライトの色に染める夕方の雨や、柔らかい光の中で静かに降る暁の雨。雨はさあつとやつてきて、瞬く間に世界を変えてしまふ。私が見ていた世界のつづきを美しく、思慮深く彩つてくれる。

悲しい時も苦しい時も、嬉しい時も、雨はいつだって隣に寄り添ってくれる。ただ黙つて、すべてを受け入れてくれる。心の底までしみ込んだ雨は、ゆっくりと静かに去っていく、心の糧や教えを残していくのだ。

帰ろうとする人を引きとめるかのように降り始める雨を「遣らずの雨」、もしかしたらこの雨は、私のまわりにだけに降り落ちてくるのでは、と思う雨を「私雨」という。雨は天からの授かりものであって、それは天使のように感情を持ち、優しさや労りや、寂しさを抱いているのではないかと思う。私は全身で、こよなく雨を愛しているから。しかし、かつて私は雨を苦手としていた。スポーツ少女だったため晴れが好きで、雨を疎ましくさえ感じていた。

そんな私を変えたのは、一人の女性作家である。江國香

織、私は彼女からたくさん事を教わった。雨が美しいこと、夕方や夜明けのすばらしさ、恋がいかに暴力的で愚かで甘やかなものか、そして孤独と絶望のこと。

彼女は、自分の好きなものを大切にしている。雨だけでなく、早朝のパン屋、昼間公園で読む推理小説や、ワイルドなマッシュルームを食べられる青い廂のレストラン、月夜に飲むとろりとした甘いお酒、それから天。好きなものたちに囲まれている彼女の暮らしは、とても有意義で魅力的だ。

彼女は自身の小説に、自分の好きなものばかりを登場させる。だからいつだって彼女の本は魅力的で、周りのささいな事から好きなものを見つけるすばらしさを、私に教えてくれる。彼女の本を読んでから、私の世界が色付きになったと思う。まるで雨のように浴びせられる不思議な魅力で、私の世界のつづきが彩られているから。彼女と同じ景色の中に住んでいるのだから、彼女のように色んなものをあらゆる角度から見えて、好きになりたいと思つたから。

私が江國香織と出会い、雨を愛することを知つたように、多くの人が自分に合う本を見つけ、自分なりの教訓を見入出してくれるといいと思う。どんなものでもいい、たった一冊のお気に入りがあれば、人生はずっと豊かになる。自分だけに通用する視点で世界を見つめ直し、新たな発見をすることが出来る。人生をきつと、自由に感じられるだろう。自分に本当に必要な一冊を、見つけ出して欲しい。それは、あなたの幸せへの鍵となるから。

栃木県立小山高等学校 二年 Aさん

読書会に参加して

私の通う男子高には一年に一回程度、近くの女子高と「合同読書会」という行事が開催される。決められた日までに指定された本を読んで、決められたテーマのもとで意見を交換するものだ。私は一年生の時にこの合同読書会に参加したが、実に有意義な時間が過ごせたと思っている。なぜなら、それに参加したことによって他の人との交流が広がっただけでなく、自分が今まで疑問に思っていたことが解決できたような気がしたからだ。

私が参加した時は宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』が指定された本だった。この本は以前、私が中学生の時に一度勉強したことがあった。その時は、恥ずかしさに負けて、疑問に思っていたことをわからないままにしておいたのだ。その時は疑問点を聞かなかつたことを後悔した。読書会に参加することが決まったときにこれはよい機会だと思い、その時の記憶を思い出しながら読書会に備えた。当日になると想像していたことだが、緊張した。それは、見知らぬ人たちがいたからか、それとも普段あまり目にするこの女子高生がいたからかは今になって考えてみてもわからない。ただ、鮮明に覚えていることは、緊張とともに何らかの知的興奮を感じていたことだ。

読書会のほうはとても印象深かった。数人のグループに分かれて、意見の交換を行ったのだが、どの人もそれぞれの考えがあった。考えてみれば当たり前のことだが、この

ときには改めて実感させられた。最初は、ほとんどの人が遠慮をしまつて、あまり盛り上がらなかったのだが、少しずつ話が续くようになった。意見の中には協調できるものもあれば、反対に反発を感じるものもあった。また、思いもよらない意見も出た。先ほど、わからなかつたところがあつたと書いたが、それは「何故、『銀河鉄道の夜』は最近出版された本のように感じるのだろうか」ということだ。話の中には黒曜石やダイヤモンドといった語句が出てきて、宮沢賢治が生きていた時代とは思えないほどなのである。それが、中学生の時の私では理解ができなかつた。

疑問に思っていたことを質問した時、どのような答えが返ってくるのかと期待や不安などいろいろなものが心の中にあつた。すると、女子高生の一人がこのように答えてくれた。「当時の宮沢賢治は西洋文学に興味をもつていて、それを取り込んだのではないのでしょうか」その答えを聞いたとき、私は心の中にあつた疑問が少しだけ解けたような気がした。その答えは完全なものではなかつたかもしれない。しかし、その時の私にとっては十分すぎる答えだったので。その後はあつという間に時間が過ぎてしまつた。

この経験は私にとつても充実したものだ。女子高生と話せたということもあつたが、読書会に参加したことによつて様々な人と出会えたことが何よりも大きいものだと思つている。そこでは、自分の考えたことが他人と話し合うことによつて、深まつただけでなく、ある一つの作品についての意見を交換することによつて、相手のことを理解することができた。さらに、他の人との触れ合いが、

私の人間的な見解の視野を広めてくれた。先生の話だと、大人にも読書会というものがあり、それは学術的なものもあれば、趣味のものもあるらしい。しかし、どんな読書会でも変わらないことが一つだけあると私は思っている。それは、読書会という場で、一つの本がいろいろな人たちとの触れ合いの場となるということだ。私はこれから機会があれば積極的に読書会に参加していきたいと思う。

栃木県立真岡高等学校 二年 Oさん



